

一 太極二陰陽の元型としてのスサノヲ

『古事記』という名の永遠のトラウマ

森下温美（関西医療学園）

I. はじめに

心理療法においては、【診断】は不要であろう。しかし、【見立て】は必要不可欠なものであり、見立てを軽んじた事例研究は、誤診に基づく自殺対策同様致命的である。

エディプスコンプレックスの【ギリシア神話】とは異質なアジャセコンプレックスの【観無量寿経】、『ゲド戦記』のわが国での映画化にあたって作者ル・グウィンからの警告を誘発するほどのリメイク、あるいは、『人魚姫』ではなく『崖の上のポニョ』が描かれる必要性には、見立ての問題が潜んでいる。そしてこれら日本独自の作品の底に一貫して流れる元型は、古事記におけるスサノヲの変容にまでさかのぼることが可能であるような気がする。これは端的に言えば、頓挫しているくどのように二元論でないのか>との問いへの答えでもあり、その明確化が、真に国民の役に立つ臨床心理学への再生につながるものと信じている。

II. あらすじ

スサノヲは禊をした父の鼻から生まれた。三貴子の一人でありながら本業を前端的に放棄し、かつて父が逃げ帰った黄泉の国に赴くべく、泣きながら姉と面会した際の乱暴狼藉（日本最古のDV記録）により神々から追放される。そして、その流浪の果てに一転、英雄となり古事記の基礎を創った。

III. 考察

①『古事記』という名の永遠のトラウマ ～大陸からショッキングなまでの文化的影響を受けたわが国の先人にとって、何をさておき図るべきであったことは、PTSD化防止作業のために【表現】することであり、生まれた物語は神話となった。神話とは刷り込まれ、ことあるごとに繰り返されながら進化する性質のものをいう。

②文化として刻印された陰陽五行説 ～大陸文化とは【陰陽五行説】に他ならないが、これを哲学そのものとしては見えないようにしつつ、遊びとして見えるような形で取り入れた。東大寺の【お水取り】のような祭祀から庶民の日常生活の隅々にまでユーモアやだじゃれをまじえてその成果が表現されている。この【絶対否認即絶対肯定】の作法もまた陰陽五行説そのものである。

③【一太極二陰陽】の原理 ～①や②のような歴史的背景があるのだから、井筒(1991)が易にマンダラの元型を観るのも、吉野(1999)が『源氏物語』等の重要な物語に【一太極二陰陽】の法則の繰り返しを観るのも自然なことであろう。

④物語の更新 ～普遍的無意識の深みに潜む元型という潜在エネルギーは、危機に際して甦る性質を有する。核による壊滅という悲劇に際しても、五行の【相生相克】の原理をじゃんけんに【昇華】させた。被虐待児の多い保護施設では、箱庭の権利をめぐるこの平和哲学的遊びで気合を入れることが好まれるし、表現が死活問題であるとの無意識的認識も顕著である。

⑤一太極二陰陽の元型としてのスサノヲ ～スサノヲは【鼻】【泣き方】【黄泉の国への希求】と大蛇退治によって【一太極二陰陽】の象徴を具現化している。

⑥仏教における一太極二陰陽の習合 ～「大死一番乾坤新たなり」、正法眼蔵『虚空』の「太殺人、人の鼻孔を搦いて、直得脱去す」「直に恁地に捉することを得て始得ならん」や「八識田中に一刀を下ろす」等の表現、およびだるまさんの象形から玉音放送まで、一太極二陰陽のリセットの法則と転識(覚り)の習合表現は、うんざりするほどわが国にはあふれている。

⑦現代哲学と箱庭療法 ～上田(1982)は「具体的にして単純な行為、しかもそこで自己の開放性と充実性が同時に成立するような、自分の身体を通した端的な事実に戻り得るかどうか、そしてそこから再び全存在を始め得るかどうか」が死活の問題となりつつあるなかで、箱庭療法の有する実在感と自由性に「呼吸するも一の快樂なり」と述べた西田幾多郎の哲学的境地につながる決して観念的ではない何かを観ている。

IV. 終わりに

落語や漫才、さまざまなCM、映画『おとうと』、「対称性の自発的破れ」の再発見としての素粒子論の発展等、わが国の精神文化は根底では現在も【一太極二陰陽】の法則に貫かれている。永遠に貫き通すことが、道でありニーチェの橋であり、ユングのいう個性化の過程なのであろう。華嚴の化身かぐや姫やポニョをわがままだとして閉じられた二元論で【発達障害】や【適応障害】に貶めるような二次被害がなくなる日を切に望む。

V. 文献

- 上田閑照 十牛図 自己の現象学 筑摩書房 1982
 吉野裕子 易・五行と源氏の世界 人文書院 1999
 井筒俊彦 意識と本質 岩波書店 1991

陰陽五行説・PTSD・個性化の過程

モリシタ アツミ